小さなエコの大きな意味と信仰

すべてのいのちを守るために

吉川 まみ
上智大学教授

① 教皇フランシスコからのメッセージ

ドキュメンタリー映画「The Letter」

ご存じのように『ラウダート・シ―ともに暮らす家を大切に』は、教皇フランシスコによって2015年5月24日に発表された環境問題についての回勅です。教皇は『ラウダート・シ』発行から5周年を記念して、「ラウダート・シ週間」を設定され、祈りや実践を通じ、私たちがともに暮らす家と弱い立場に置かれた人々の保護に取り組むように呼びかけられました。

今年は、去る5月21日から28日まで「ラウダート・シ週間」が実施されました。「地球の希望、人類の希望」を世界共通のテーマとし、ドキュメンタリー映画「The Letter」の視聴が勧められていましたが、皆さんはもうご覧になりましたか?

「The Letter」とは、昨年のアッシジの聖フランシスコの祝日（10月4日）に公開された『ラウダート・シ』に関連するドキュメンタリー映画です。周縁に追いやられた貧しい人々や先住民、若者や自然界の声の代弁者ら、バチカンに招かれた人々と教皇の対話を基にした、教皇から私たち一人一人へのメッセージです。

私は、日本の身近なところに寄り添うべき隣人がたくさんいることを思い起こしながら視聴しました。被ばく者や被災者、水俣病などいまだ終わっていない公害や、日本の高齢者世帯の約4分の1が「老後貧困」（生活保護水準以下）に苦しんでいることなどなど、人間の尊厳や人権が傷つけられ、気候変動にも脆弱な隣人の存在です。

「世界環境デー」と教皇フランシスコのことば

「かけがえのない地球」という言葉が世界中を駆け巡ったのは、今から半世紀前のことでした。

1972年6月5日から16日まで、環境問題をテーマにした初めての「国連人間環境会議」が開催されました。「かけがえのない地球」とはこの国際会議で掲げられた言葉です。この時初めて、環境問題が自然資源の汚染や枯渇などの問題だけでなく貧困問題と密接に関わるものとして議論されたことは、国際社会の大きな進歩であったと思われます。

その後、国連はこの会議開催初日の6月5日を「世界環境デー」と定めました。日本でも環境庁（当時）が6月5日を「環境の日」と定め、6月は国内外で環境保護活動が意識的に行われています。

教皇フランシスコは着座して間もない2013年の6月5日、世界環境デーの日の一般謁見の講話で、環境問題について語っておられます。それは、環境の劣化の広がりといのちの軽視の両方を助長する「使い捨て文化」とは、「他の人たちの必要に何の価値も見いださない文化」であって、失いつつあるのは神の創造に対する驚きや観想、耳を傾ける姿勢であると語っています。（「カトリック新聞」2013年6月16日付1面）

映画「The Letter」に登場する人々。左からセネガルの青年、アマゾン先住民族の首長、インドの少女、ハワイの研究者夫妻。映画は教皇がこの人々をバチカンに招き声を聞く過程に密着した

「The Letter―A Message for Our Earth」
（YouTube 配信）https://www.theletterfilm.org/

※日本語字幕の設定
「設定（⚙）」→「字幕」→「自動翻訳」→「日本語」（自動翻訳）

ラウダート・シ週間公式ウェブサイト
https://laudatosiweek.org/（日本語未対応）

気候危機の根本原因の一つ、汚染・ゴミから語る回勅

いま、世界が一丸となって取り組んでいる環境問題と言えば「気候変動」の問題で、教皇も繰り返しこの問題に一人一人が何らかの行動を起こすよう呼びかけておられます。それでも『ラウダート・シ』を読むとあることに気が付きます。

それは、教皇が何よりも先に汚染・廃棄物の問題から語り始めていることです。回勅では第1章「ともに暮らす家に起きていること」で科学的根拠に基づいて環境問題を概観していますが、この章の第1節「I 汚染と気候変動」の冒頭に「汚染、廃棄物、使い捨て文化」という小見出しが掲げられています。

気候変動の直接原因よりも、あらゆる環境問題の根本的な原因の一つ「汚染、廃棄物、使い捨て文化」から語り始めるところに教皇のまなざしがとてもよく現れています。それは、回勅の中で教皇が、傷つきやすさという点で自然と社会的な弱者の間には密接なつながりがあると強調することとも関係があります。弱者の擁護は「総合的な（インテグラル）エコロジー」の倫理的な要請だと説くように、教皇は、おそらく国際的な議論の俎上に載ることはまれであろう貧しい人々の日常生活上の健康被害に最初に光を当て、次のように語っています。

「人々が日常的に被っているさまざまな形態の汚染があります。大気汚染物質にさらされることによる健康被害は広範囲に、とくに貧しい人々に及び、おびただしい数の早逝をもたらす原因となっています。たとえば、料理や暖房に使う燃料からの高濃度の排煙を吸うと病気にかかります」（『ラウダート・シ』20）

そして、私たちの家である地球が「ますます巨大なゴミ山の体をなし始めて」いる（同21）問題は、「使い捨て文化と密接につながっており、そうした文化では、ちょうど物がすぐゴミにされてしまうのと同様に、排除された人々が悪影響を被る」（同22）のだと述べています。

カトリック教会が地球環境に目を向ける際、基盤とするのは『ラウダート・シ』で提唱されている「総合的な（インテグラル）エコロジー」です。これは、神と、自然と、社会と、そして自分自身の内面との調和ある関係を追求するものです。

私たちは、教皇からの手紙にどのように応え得るでしょうか。この連載が、私たち一人一人が置かれた、身近なところからできる小さなエコ実践の一助となればと思います。